

パネル発表「画中詞研究への視座——絵と言葉のナラトロジー」

オーガナイザー：山本聡美（共立女子大学文芸学部教授、中世絵画史）

趣旨文

絵の中に言葉が記される時、両者は時に補完しあい、時に対立をはらみながら響きあう。本パネルでは、画中詞に備わる語りの構造と機能について、美術史学・文学・歴史学の領域を連結して分析することを試みる。画中詞の構造と機能、すなわち語りの主体、想定される読者、語られる内容、語られ方、語りの効果についての議論を深めるため、はじめに個別の作品論を通じて具体例を示し、画中詞としてカテゴライズされる中にも、構造と機能に多様性があることを明らかにする。その上で、絵巻という形式を相対化する目的で、屏風、大画面掛幅画、詩画軸など、垂直方向に絵と言葉が結びついていく事例にも目を向ける。加えて、葦手絵や歌絵といった、絵そのものが特定のテキストを喚起する記号として機能する場合との比較を試みる。

本パネルの前提となる研究史を振り返ると、先に掲げた問題意識は決して新しいものではない。美術史学においては佐野みどり「絵と詞—「華嚴縁起」をめぐる—」（『日本文学史を読むⅢ中世』、有精堂、1992年）が、文学においては小峯和明「画中詞の宇宙—物語と絵画のはざま—」（『日本文学』41（7）、1992年）が、相前後して行った問題提起に基本的論点は出そろっている。また、その後、四半世紀ほどの時間をかけて個別の作品論も、美術史・文学双方で蓄積されてきた。

一方で、この間、絵を見る／物語を読む「場」の問題、王権と文化の問題、イメージやテキストの受容や解釈の問題など、美術や文学をめぐる新たな論点も開拓され、現在は、それら諸論点が一端集大成されて、次なる位相へのシフトチェンジが意識される時期にもさしかかっている。このことは、本パネルにおいても念頭におくべきであろう。

画中詞をめぐる直近の研究動向に目を向けると、現在サントリー美術館で開催中の「絵巻マニア列伝」（2017年3月29日～5月14日）では、画中詞を伴う最古例と目される「彦火々出見尊絵巻」（模本）をはじめとして、「矢田地蔵縁起絵巻」「福富草紙絵巻」「放屁合戦」「法師物語絵巻」など、平安から室町までの作例を一堂にて展覧する場が出現している。時代や主題の異なる作品の比較を通じて、個別の作品論を深める絶好の機会である。さらに、「福富草紙絵巻」や「放屁合戦」の詞書染筆者と目される伏見宮貞成親王は、生涯にわたって絵巻を愛好、しばしば子弟の教育にも絵巻を用いていたことが、『看聞日記』などから知られる人物である。おそらく読み聞かせの音声を伴っていたであろう絵巻鑑賞の場と、画中詞を結びつけて検討することのできる稀有な事例として、本展でもここに焦点をあてている。今回のパネルにも、本展を通じて得た新知見を反映させることを目指す。

また、現在シリーズの刊行が始まり、年内には完成予定である『天皇の美術史』（全6巻、吉川弘文館）は、直接画中詞を取り上げるものではないが、「人々の心性を掘り起こし、感性の歴史学としての体系を構築すること」（第2巻、伊藤大輔氏による総説より）が標榜されている点で、画中詞研究にも一つの方向性を示唆する。絵と言葉が不定形に結びつき、ポリフォニックな場を出現させる画中詞から、誰の、どのような心性を読みとくことができるのか、本パネルでは、その点にも関心を向けつつ会場の議論を喚起したい。

発表者（論題と要旨）

「画中詞の成立——「矢田地蔵縁起絵巻」を中心に」

井並林太郎（京都国立博物館研究員、中世絵画史）

十三～四世紀は、画中詞の発生・成立期と考えられる。この時期の作例や画中詞の種別については先行研究によって網羅され、その展開についてひと通りの叙述がなされている。しかし、単なる場面説明など、絵の付随的な地位に留まる画中詞と、絵と相互に関係し、画中詞ならではの効果を発揮するそれとの区別は曖昧である。本発表では、そのような「画中詞ならではの効果」が定義されうるのかという検討も含めて、二者を区別し、画中詞史において後者が成立した段階を見定めることを目指す。

発表の前半では、先行研究を整理しながら発生・成立期の作例について概観し、後半では「矢田地蔵縁起絵巻」（十四世紀、矢田寺蔵）を取り上げ、その画中詞の効果について考察する。詞書と同筆で、絵巻成立とほぼ同時に記入されたと思われる画中詞に、絵巻鑑賞法の観点からして、作品の魅力を高める「画中詞ならではの効果」が見出せることを指摘したい。

「宝蔵絵の再生——伏見宮貞成親王による「放屁合戦絵巻」転写と画中詞染筆」

山本聡美（共立女子大学教授、中世絵画史）

サントリー美術館所蔵「放屁合戦絵巻」には、「定智筆以御室絵本写之／文安六年五月 日」との奥書があり、その原本は蓮華王院宝蔵から仁和寺御室に伝来した、いわゆる宝蔵絵であった可能性が高い。さらに、本作の奥書と画中詞について、伏見宮貞成親王（後崇光院、1372～1456）筆であることが有力視されており、上野友愛「数寄から広がる絵巻好き」（サントリー美術館『絵巻マニア列伝』展図録、2017年）では、貞成のもとで平安時代の原本を転写した際に、同じく画中詞を伴う「福富草紙」の後日譚を想起させる台詞が当て書きされた可能性を指摘する。本発表では、『看聞日記』に頻出する絵巻鑑賞の場を精査し、貞成周辺で画中詞のテキストが創造された蓋然性について再検証する。その上で、古い絵巻に新たな解釈を追加して再生する機能を、画中詞の一側面として論じる。

「画中詞の創作——『住吉物語』絵巻と『稚児今参り』絵巻」

江口啓子（名古屋大学大学院、中世文学）

画中詞の多くは物語の本筋と関わらない内容で、物語のいわば「遊び」の部分とも言える。しかし、本筋と関わらないからといって適当に創作されているわけではない。画中詞を有する絵巻、絵本の伝本を比較すると、画中詞もかなり忠実に写されていることがわかる。詞と絵と同様に、画中詞も意図を持って創作されているのである。では、画中詞はいつどのように創作されたのか。発表者が長年研究を続けてきた『新蔵人』絵巻では、詞と絵と同時に画中詞も創作されたと考えられる。では、もともと詞と絵が存在した作品に画中詞が付けられた場合はどうなのであろうか。

今回、画中詞を持つ物語作品として取り上げるのは『住吉物語』絵巻と『稚児今参り』絵巻である。前者には百を越える伝本が確認されており、諸本の分類や成立に関する研究が長年に渡ってなされてきた。この物語が本来、絵を伴って享受されていたことはすでに指摘されている。『住吉物語』の諸本の内、画中詞を持つ伝本は二系統存在する。それは友久武文氏の分類では徳川本系と横山本絵巻系にあたる。『住吉物語』における画中詞は、明らかに後に増補されたものであるが、横山本絵巻系ではこの増補された画中詞のために詞の部分を改作し、他本にない絵を新たに創作したと考えられる箇所がある。そしてそれは『稚児今参り』絵巻の画中詞との影響関係が見られる部分なのである。本発表では、『住吉物語』絵巻と『稚児今参り』絵巻の共通する画中詞表現を分析し、画中詞の創作の問題に迫っていきたい。

「美術からみた画中詞——書記空間と絵画空間の関係性から考える」

三戸信恵（山種美術館特別研究員、中・近世絵画史）

画中詞を画中詞たらしめている最大の特徴は、誤解を恐れずに言えば、画面の中にテキストが書き込まれている点であろう。西洋絵画におけるタブロー的な概念からすれば、署名以外の書記文字が絵画空間内に存在することは極めて例外的に映るかもしれない。だが、日本における視覚的造形の歴史を概観すれば、芦手、歌絵や歌仙絵、詩画軸などの画賛、書と料紙装飾の下絵、さらには版本などの印刷メディアにいたるまで、テキストが書かれる書記空間と絵の世界を形成する絵画空間との境界が解消する、あるいは一体化する現象は、平安時代から近世にかけて、様々な分野に広く見出せるものである。

本発表では、こうした画中詞以外の諸例を挙げながら、画中詞に他の分野と通じる特徴を見出すことができるのか（あるいはできないのか）、画中詞が他の分野とどう違うのかなど、画中詞を一旦相対化してみることで、画の中の詞としての意義を問い直してみたい。

ディスカッサント

藤原重雄（東京大学史料編纂所准教授、中世史）

パネリストの報告を引き継いで、扱いきれなかった事例から適宜紹介をおこない、同時代的な観点は維持しながら、論点を外側にも広げて、画中詞およびその研究の位相を把握する。例えば、絵画と文字との関係に対して、言葉と文字、物語と詞章（狭義のテキスト）、絵画と記号的モチーフ・文様といった軸を参照し、銘札・色紙形・絵解き台本、扇面・色紙などの小画面の画賛、表記・書体・文体・話法、説明・注釈行為、制作環境・鑑賞空間といった論点が予想されよう。